

## くすりの雑学「麻薬の話」

横浜市立大学名誉教授 三須良實

1977 年以來、22 年の間、薬理学の講義をしてきた。単調になりがちな系統講義の合間に、学生の眠気を覚ますために、さまざまな雑談をおり混ぜながら講義を進めてきたが、ここでは麻薬講義の際の雑談をもとに書いてみたい。ネタは新聞、単行本等である。

毎年の総論講義の第一声は「薬は毒物」である。クスリをさかさに読むとリスクになる。薬と毒は表と裏で、麻薬は激痛を鎮めるが、一方、夢見心地の陶酔感を生じる。代表的麻薬のモルヒネの名は、ギリシャ神話の「夢の神」Morpheus に由来する。陶酔感→慢性中毒→禁断症状→麻薬願望→反社会的行動の連鎖と急性呼吸麻痺が毒にあたる。

各論の麻薬講義の第一声は「医師として麻薬は麻薬として扱う事、しかし、癌患者の末期に限っては麻薬を十分に使いこなさしめる医師になれ」である。麻薬取締法を守るべき立場の医師、薬剤師および看護師の麻薬中毒に陥る比率は一般の人よりかなり高い。一方、未だに、多くの医師は、慢性中毒に対する警戒感が強く、麻薬を使いたがらない傾向が強いと思われる。また、終末期の癌患者の場合、麻薬を上手に使う医師になってもらいたいとの願いがあったからである。WHO が癌の激痛からの解放を示したのは 1986 年、厚生労働省が医療用モルヒネの使用を規制から推進に方向転換したのは 1995 年である。

Opium「アヘン」は、これもギリシャ語由来で液を意味し、タイ、ミャンマー、ラオス三国の国境山岳地帯で産生されるケシの未熟果皮を傷つけて出てくる乳液を乾燥させて造る。このケシ種の学名を、リンネは「果てしない幻想の眠り」の意味から *Papaver somniferum* と名づけた。日本で栽培禁止になっているソムニフェルム種のケシの花の主な二種をのせておく。

世界には、三つの麻薬密売ルートがある。一つは「魔の三角地帯」、タイ、ミャンマー、ラオスの山岳地帯からアメリカへの流れと、もう一つは「黄金の三日月地帯」といわれるパキスタン、アフガニスタン、イランを通るヨーロッパへの流れである。二つのルートで運ばれる麻薬はモルヒネとヘロインであり、その支配者はシシリー島出身のマフィア一族とされている。

麻薬と戦争とは密接な関係がある。19 世紀前半には清国の麻薬禁輸処置の結果起った英国とのアヘン戦争があった。20 世紀、東南アジア各地に起った地域戦争の軍資金のほとんどが麻薬密売によるものとされている。たとえば、1995 年の新聞記事



ソムニフェルム種のケシの花(一重咲)  
札幌市保健所のホームページより

## ○目次

巻頭言	.....P1
理事会報告	.....P4
お知らせ	.....P5



一重咲

によると、「魔の三角地帯」で、麻薬王の異名を取ったクン・サーは約一万人ものモン・タイ軍という私設軍団を抱えていたという。ソ連軍のアフガニスタン侵攻は負戦となり、多くの麻薬中毒兵を抱えて帰国することになった。ベトナム戦争ではアメリカが破れたが、その際の薬は LSD-25 である。多数のアメリカ兵が LSD 中毒となって帰国した。

LSD は、アヘン類とは構造の異なる合成薬であるが麻薬指定であり、薬理的に幻覚発現を一つの特徴とする。ベトナム戦争中期にニューヨークに留学していたが、帰還兵が高所から飛び降りて死亡したという新聞記事を数回見ている。自殺目的ではなく、背中に羽根が生えているのが見え、羽根にもさわれ、鳥になった錯覚から飛んでみた結果としての墜落死とみなされている。

LSD は不思議な薬である。ヒッピーの元祖達は LSD を試用し、幻風景をみてそれを絵にしはじめた。その絵は絵画史に psychedelic 派の名を残している。サイケデリックとは「解き放たれた心」といった意味になる。赤、緑、黄色などの極彩色を混ぜこぜにしたような色調で、これは衣服などの服飾の世界にも名を残す事となった。いわゆるサイケ調の色彩である。

世界の第三の麻薬密売ルートは南米のボリビア、コロンビア、ペルー等からアメリカへの流れで、その麻薬はコカインである。コカインの特徴の一つは精神毒性にあり、高揚感を生じる。精神分析学のフロイト、「ジキル博士とハイド氏」のスティブソン、シャーロックホームズもののコナン Doyle 等の知識人がコカインを慣用したという。

コカインはココアの葉の成分である。ココア葉は遠くインカ帝国の時代には貴族の嗜好品だった。ココア葉が貨幣代わりに用いられた時代もあった。たとえば、婚約が成立すると、彼氏はココア葉の束を持って、彼女の家に行き、何日か宿泊して、労作業に従事した後、花嫁を連れて帰るといった風習があった。時代が下ると、労働者がアンデス山系を重い荷物を背負って歩きながら嘔むようになったという。ココア葉を噛みながら労働すると疲労感とか空腹感を感じなくてすむ作用もある。また、日本の敗戦後、アメリカ文化の象徴としてココアが入ってきた。その語源はココア葉に由来し、驚くべきことに、初期の飲料にはココア葉の成分が入っていて、爆発的に売れたという。バチカンの僧侶達も愛飲したという。麻薬の成分を含む飲料というわけで当然の事として、初代の会社は廃業させられる運命となった。コカインに関連した紛争、戦争も起こっている。たとえば、コロンビアの麻薬軍団は国の軍隊よりも強く、麻薬撲滅を主張した大臣は国外亡命を余儀なくされたり、麻薬撲滅キャンペーンを始めた新聞社はダイナマイトで吹っ飛ばされたという。1989 年、アメリカ軍のパナマ侵攻が起っている。パナマ大統領のノリエガ将軍がコカインの密輸ルートに絡んでいるとの容疑・名目 (?) から逮捕するための出兵で、バチカン代表部に逃げ込んだところで逮捕、裁判、判決は 40 年の禁固刑となり服役した。真実は歴史の霞みのかなたにあるというべきであろうか。

20 世紀のモルヒネ研究の最大の成果は、1970 年代に入ってから相次いだ内因性モルヒネ様物質の発見である。これに関連する社会的現象として、同年代あたりから、臨死体験が話題になりはじめて来た。これは、死に瀕した人が九死に一生を得て意識を取り戻した時に語る不思議なイメージ体験である。一般に浮遊体験が多く、民族あるいは文化の違いにもとずく共通性がある。日本人の場合は花畑と三途の川、欧米人はトンネルを十字架に導かれて花畑に出るといったパターンになる。いずれの場合も、夢とはとても思えない現実性があるという。直接話を聞いた東北の老女性患者の一例は、「じっちゃんと一緒に、白い死装

束を身につけ、わらじばきで、杖をつきながら石ころだらけの山道を登っていた時に、ポイント、じっちゃだけがよ、空に飛び上がって行ってそのまま姿が見えなくなってしまい、自分だけ独り取り残された」というものである。臨死体験の解釈をめぐって、死後の世界をかいま見た体験でありその存在の証明であるとする一方、弱りきった脳の中で起きる幻覚にすぎないともいう。アメリカでは、学問的研究の対象として、心理学者、精神科医、脳生理学者、宗教学者、哲学者、文化人類学者等による研究組織ができ、1990年に、ワシントンのジョージタウン大学で、第一回臨死体験国際会議が開かれている。



ソムニフェルム種のケシの花(八重咲)  
札幌市保健所のホームページより

瀕死から蘇った人がどの程度の割合でこの体験をしたかについて、いくつかの統計はおおよそ 50% から 70% の数字を出している。最も客観的な世論調査機関とされる、ギャラップもこの問題を取り上げ、30% と報告している。生体の脳内には、死に際しての苦痛・苦悩を軽くするための最後の防御機構として、内因性モルヒネ様物質を放出するしくみが備わっていて、臨死体験とは、この反応に伴って起る幻想発現かもしれないと思えるがいかがであろうか。

麻薬の講義の間の雑談の一つにホスピス運動も取り上げてきた。最近日本でも、ホスピスあるいは緩和医療病棟が増えつつある。今年になって、癌患者の終末期医療について、つくづく考えさせられる

身近な体験をする事になった。癌専門医の兄を、胃癌手術から 4 年半後、肺癌の脳転移により失った。脳転移と診断された時の見舞いの折りに、「クールにやったらどうか」と勧めておいた。まだ、放射線のガンマーナイフと抗癌剤治療に望みを託している時期で、「残念なことになったが、やってみるしかない」、「駄目ならそれでしょうがない」と言っていた。酒好きの兄は、酒も断って放射線治療に臨んだか、期待していたほどの肺癌巣の縮小も見られず、副腎にも転移、運動障害も憎悪し、緩和ケアに移行した。このあたりから輸液を拒否するようになったという。主治医が「お願いですから点滴させて下さい」と言って、睡眠中に輸液しても、翌朝目を覚ますと、自ら抜いてしまったという。尊厳死の意思表示そのものであったと思われる。そんな折に見舞ったのは、1 回目のモルヒネ皮下注射をした当日であった。「痛いのか？」との問いに「痛いよりは苦しい」との返事であった。「主治医にお会して、モルヒネを増やすようお願いしておいた」と伝えた。注射量は常用量の数倍程度までは増えたいが、主治医は「これ以上は呼吸抑制を起すので」と言われた由である。主治医としての苦勞の程を察する事ができた。酒好きの兄にとっては、多少とも呼吸抑制作用の弱い、ワインにモルヒネだけを溶かしたいいわゆる「ブロンプトンカクテル」(初期の英国ブロンプトン病院の処方にはコカインも含む) の内服が好ましいとの思いがよぎった。しかし、実際は、ダンピング症候、嚥下障害から誤飲の危険性も高まり内服不能の状態に入っていたようである。



八重咲

終末期医療について医師が従うべき、広く社会的合意に達しうる、判断基準・指針作りの必要性を痛感する一方で、自分自身が患者であると仮定した場合、できる事なら、ブロンプトンカクテルに馴染む日々を在宅医療の形で過ごすのが最も好ましいとの思いを深くする体験となった。